河北潟湖面利用ルール

記録③ 最初の話し合いと、バス釣りグループによる自主規制から15年、河北潟湖面利用ルール策定から6年が経ちます。

2005年に河北潟自然再生協議会の総会において、湖面利用の問題が提起された頃、河北潟ではカヌー、バス釣り、水上オートバイ、ウェイクボードなど様々なレジャー・スポーツに利用する人が増えていました。走行するボートに驚いて上空を飛び交うカモが目立ち、またヨシ原などの生息場所が狭められている中で希少猛禽類への影響が懸念されました。

問題提議から遡ること5年前、ブラックバスの釣りをおこなう人たちの中には、自然環境の保全や野生生物との共生について積極的に取り組もうという動きが見られ、2001年3月16日に、河北潟湖沼研究所では河北潟を主な釣り場とするグループである、北陸ランカースナイパーズと北陸バスフィッシング協会の代表と懇談をおこないました。２グループからは、河北潟のブラックバスはそれほど魚食性が強くないこと、生息数も限られていること、魚類や生態系へ深刻な影響をもたらしているのは、護岸やゴミの不法投棄、水質汚染などであるとの考えが示されました。また、私たちの側からは、湖岸をバスボートが行き交うことによって湖岸で繁殖する鳥類への影響が懸念されていることなどを伝えました。２つのグループは私たちの提案を積極的に受けとめ、河北潟の希少猛禽類であるチュウヒが繁殖する場所での育雛期の釣りを自粛することを決定し、そのことをホームページで発表しました。それは、河北潟を常に利用する団体が河北潟の自然環境保全のために自主規制を設けた先進的な取り組みでした。また、河北潟を釣りの対象である魚類だけでなく、野生生物の重要な生息環境として認識している点で画期的なものでした。

このような話し合いに始まり、「河北潟の湖面利用について考える集い」、行政を含めた多くの湖面利用者が参加する「河北潟湖面利用協議会」の発足、河北潟の湖面利用ルール策定につながりました。第2回集いの中で、利用者がお互いに守ることのできる自主的なルールをつくることが確認されました。利用者が運用する中で調整や見直し、拡充することから、そのための協議会が毎年行われています。

最近では、バードウォッチングを楽しむ人たちによる影響も懸念されています。時期によっては数十分の観察や同じ所に留まることで、保全対象の鳥類の繁殖を妨害することもあり、気づいていたら配慮できることなど、協議会の意見交換では色々と理解を深めることができます。今後も、河北潟を利用する多くの人たちが協議に参加し、河北潟の秩序ある利用と、野生動植物ならびに自然環境が守られることが望まれます。